「感性と表現」についての学生の学び：保育者養成課程の「子どもの理解と援助」における授業実践

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 有紀, Yamamoto, Yuki メールアドレス: 所属:
URL	https://senzoku.repo.nii.ac.jp/records/2692

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

洗足論叢　第51号　2022度

研究論文

「感性と表現」についての学生の学び

―保育者養成課程の「子どもの理解と援助」における授業実践―

Student's Learning on the Sensibility and Expression of Children
–A Study of Practice for Understanding and Support of Children in Early Childhood Education and Care Training Course–

山　本　有　紀
Yamamoto Yuki

1　問題と目的

保育現場では「子どもの理解」が不可欠であり、保育者養成校においても「対象理解」の科目として心理科目が設けられている。とりわけ、保育者養成校における「子どもの理解と援助」の科目では、個々の子どもの実態を捉え、子どもの心情に寄り添う保育者の姿勢や態度について、実習や将来の保育現場で実践につながるように理解することが到達目標とされる。一方、山本（2010、2011、2012）の調査結果より「子どもの心情をうまく読みとれず、援助に自信が持てない」「具体的な援助がわからない」など実習経験を重ねつつある初学者にとって、「子どもの理解と援助」がさす保育者の具体的な関わりを思い描いて実践することが難しい状況であり、子どもの心情把握と援助を直観的、感覚的に行っている実態であることがわかっている。山本（2019）は、子どもの理解と援助における“実践力”の向上を目的に保育者養成課程での心理科目の教授内容を検討し、子どもの育ちと学びの特性から、とりわけ言葉の表出や理解などの点で発達の途上にある低年齢児との関わりにおいて、実習生として子どもの思いを汲み、応答することに戸惑いを感じる実態があり、子どもの心情を五感を通して「感じる」こと、すなわち「感覚」への意識が実践において有用であることの可能性を示唆した。

保育者は、日々の遊びや生活のなかでの子どもの驚きや発見、心の揺れ動きに対して、子どもの視点で感じとること、子どもの感性や素朴な表現にも目を向けることが求められる。レイチェル・カーソン（1996）は、「『知る』ことは『感じる』ことの半分も重要ではない」と、子どもにとって「感じること」の重要性を述べる。「感じること」は、「表現」の源となる。保育内容の5領域の1つに「表現」があるが、この領域は造形や音楽に限らず、子どもの感情や思いなどの内面の表れとして、個々の子どもの個性が現れると考えており、子どもの生きる姿、そのもの全てを「表現」としてみることで、子どもの内奥に触れ、子どもの見え方や保育における関わりにも影響があると考える。このことは、津守（1979）が、子どもの行為の中に「子どもの世界が表現される」とし、子どもの些細な行動や表情にも、その時の子どもの気持ちが反映されると述べていることとつながる。また、子どもの「表現」に目を向けることは、その「表し」に至った子どもの過程（何を感じ、何に心を動かされたのか）に目を向

けるといった、子どもの内面を捉えて援助するという保育者養成課程の心理科目「子どもの理解と援助」の真髄に通じると筆者は考える。汐見（2020）は、保育では子どもの「表出」と「表現」には接点が多くあり、子どもの「表出」を保育者がその子なりの「表現」と捉えることの重要性を唱える。理由として、幼い子どもではほとんどが「表出」として見受けられ、保育者はまずそれを「表現の芽」として受け止めていること、様々な表出をその子らしい表現の行為として受け止め、次第に自覚的で意図的な表現へと位置付けていくこと、表現として受け止めてくれる存在があって「表現」になるため、保育所保育指針でも保育者の重要な役割として示唆されていることを述べる。また山田（2020）は、様々な形で表れる幼児のひたむきな表現の芽に柔軟に対応できる保育者を目指すには、生活や遊びの中での子どもの様々な表現に気付き、受け止めることのできる豊かな感性が保育者自身に必要と述べている。本稿でも「表出」と「表現」の異同を厳密に区別せず、接点を持つものとして扱う。

「感性」の定義は多義的である。「感性」について『広辞苑（第７版）』（2018）では、「感覚によって呼び起こされ、それに支配される体験内容。従って、感覚に伴う感情や衝動・欲望を伴う」とある。平田（2010）は、情報や刺激を視覚や聴覚など「感覚」を通して「感じる」、そこから「考える」「思う」といった「心の動き」が生まれ、感じたことをもとに考えたり思ったりし、その考えや思いを「話す」「身振り」などの「行動」に移すときに働くのが「感性」であると整理する。また、佐藤（2018）は、幼稚園教育要領における領域「表現」のねらいである「豊かな感性」について２系統の分類を行ったが、その一つとして感性の発達過程を「①感覚体験」「②感動」「③感動の共有・明確化」「④価値化」の４段階とし、「感性」は見え難い資質・能力であること、生きた経験から感じ取り、気づき、価値を見出すことと述べる。以上より、本稿でも「感性」は「感覚」を起点としたつながりのある体験内容と考える。

本研究では、子どもの理解と援助に関する実践力を高めるための心理科目の教授内容として「子どもの感性と表現」に焦点をあてる。筆者が担当するＳ短期大学１年次開講「子どもの理解と援助」の科目において「子どもの感性と表現」を主題とする授業を行い、「乳幼児特有の捉え方や学びの特色について理解する」「乳幼児の感性と表現の具体的な姿を知り、それに応じる保育者の関わりについて理解する」「子どもの世界を感じることの大切さを理解する」「保育者に必要な感性を理解し、今後の保育現場での実践における自己課題を考える」といった到達目標を掲げ、「身近なものを子どもの視点、感性を意識して捉え、自分なりに表現する」「発表」「捉えや学びを自分なりにまとめる」という手順をとり、学生にどのような学びをもたらすのかを調査する。捉えたものを学生なりに文章に表し、他の学生と共有し、今後の保育実践を意識しつつ学びをまとめた記述より、心理科目としての教授内容の検討を行うことを目的とする。

2　方法

2-1　本調査の全体像、対象、時期、手続き

神奈川県私立Ｓ短期大学１年生（筆者が講義を担当する３クラス、計114名）を対象に、2021年12月から2022年２月の「子どもの理解と援助」の科目において「感性と表現」を主題とした授業を行った。授業、課題、Googleフォームを活用したアンケート調査、発表、学びの整理といった一連の過程を、本調査の概要として表１に示す。

表１　本調査の概要

＜到達目標＞
・乳幼児期特有の学び（直接的な体験を通して外界を捉えること）について理解する
・乳幼児の"感性と表現""素朴な表現"の具体的な姿を知り、それに応じる保育者の関わりを理解する
・子どもを理解するために、子どもの世界を感じることの大切さを理解する
・保育者に求められる感性の大切さを理解し、今後の保育現場での実践についての自己課題を考える

＜手順＞	＜目標＞
段階１：第11回 授業(対面授業）2021年12月17日 ・"子どもの感性と表現"を主題とした授業を行う ・課題についての説明を行う（研究倫理について説明する）	・感覚での直接的な体験を通して外界を知るという、乳幼児期の学びの特徴や捉え方を知る ・遊びや生活の中で、乳幼児は様々に心を動かしていることを理解する（参照：保育所保育指針） ・日々の生活の中で生まれる、乳幼児なりの表現に目を向けて関わることの大切さを知る ・"感じる"ことの大切さ、"豊かな感性"が示すものについて知る
段階２：各自、課題に取り組む（心動かされたものの写真もしくは動画の撮影および自己分析） ・各自、普段の日常の中で、子どもの感性を学ぶつもりで心動かされたものの写真や動画を撮る ・撮影した画像もしくは動画について、自分なりに分析する **（アンケート①の実施）**	・子どもの感性を学ぶつもりで、子どもの普段の日常を意識し、自身の日常を観察する ・日常での発見、感動体験が、子どもにとってどのような意味を持つのかに気づく ・感覚での直接的な体験を通して外界を知るという乳幼児期特有の捉え方や学びを経験し、体験を振り返りながら自分なりに表現する
段階３：第14回 授業 発表（Zoomによるオンライン授業）2022年1月21日 ・段階2で入力した画像もしくは動画について、一人1分～1分半で発表する ・クラスメイトの発表を見る・聴く	・発表では、自分の考えや思い、感じたことを自分なりに表現する ・他者の発表を通して、子どもの感性と表現、保育者の関わりについて自分なりに考える ・他者の発表に共感したり、受け止めたりするなかで、個々の感性が多様であることに気づく
段階４：第15回 授業（Zoomによるオンライン授業）2022年1月28日 ・第14回授業での発表についての総括を行う ・段階2での自分なりの分析をクラス全体で情報共有し、各自で読むように指示をする ・改めて、"子どもの感性と表現"について説明をする（参照；幼稚園教育要領、保育所保育指針） ・"子どもの感性と表現"について自分なりに分析し、まとめる **（アンケート②の実施）**	・第14回授業の発表についての総括より、子どもの感性と保育者の関わりについて考える ・幼児教育保育で重視される"子どもの感性と表現"の内容を理解する ・乳幼児期の学びの特色について理解を深めるとともに、乳幼児の"素朴な表現"について理解する ・子どもを"理解する"ために、子どもの世界を"感じる"ことが大切であることに気づく ・保育者に求められる感性と、保育者の有り方が子どもとの関わりに大きな影響があることを知る ・感じたことや気づいたことを自分なりに文章に表し、今後の保育実践について考える

※全て対面授業の計画であったが、段階３・４は、学校の方針により対面授業ではなくオンライン授業へ切り替わった。
　オンライン上での発表となることを周知し、差支えがないか確認したが、該当する学生はいなかった。

段階１では、子どもの「感性と表現」を主題とした講義を行うとともに、一連の学びの過程、取り組む課題について学生に説明した（表２)。

表２「感性と表現」についての講義内容および課題についての説明

１）乳児期の育ちに関する視点と物との関わり
・乳児期の保育→5領域が密接につながる　　参照：厚生労働省　0歳児の保育内容の記載のイメージ
　「健やかに伸び伸びと育つ」「身近な人と気持ちが通じ合う」「身近なものと関わり感性が育つ」
２）"感じること"の大切さ
＊子どもの感じていること、考えていること、表現は実に多様。多様性こそ個性
・子どもは毎日の生活の中で身近な周囲の環境に主体的に関わりながら、不思議さ、面白さ、美しさなどを感じ、心を動かす
　物の形や色、手に触れた時に沸き起こるイメージを元に自由な発想で遊ぶ
　→見える姿・聞こえる言葉のみの注目ではなく、子どもがその表現を生み出す過程に着目する
　→子どもが何を感じ、心を動かされ、どのような感情を抱き、何を想像し、イメージを広げているのか、
　　何に興味を寄せ、面白いと感じているのかなど、子どもの気持ちを想像したり考える姿勢が保育者に必要
　→子どもの多様で豊かな感性と表現は、感性的な出会いのある環境と保育者の言葉かけによる
　→子どもが環境に対して主体的に関わりたくなるように（見たい、触れたい、試したい）
＊保育者が子どもの素朴な表現の姿を受け止め、共感、伝え合い、表現したくなる環境と言葉かけの工夫が大切

保育所保育指針第2章3－2－オ－（ウ）内容の取扱い－①
「豊かな感性は、身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の子どもや保育士などと共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること。その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気づくようにすること」

　→　子どもは環境に能動的に関わることもあれば、静的に心の中で対話することもある
　→　感性の経験が、その後の表現での発想を豊かにし、表現への思いや意図を形作る
　→　日々の生活の中で生まれる乳幼児なりの感性や表現に目を向け、関わっていくことが大切
　　例）光る様子を眺める / 楽しい気持ちになり歌を口ずさむ/ 身振り手振り
＊保育における環境　"ひと・もの・こと"に囲まれ、相互作用しながら子どもは生活をする
＊心地良さの体験→安心感→周囲の環境への主体的な関わりが増す / 子どもが"自己発揮"できるような環境を工夫する
＊子どもの学びの特徴：五感を通した直接的な体験の重要性
＊感じる→思う・想像する→表現・創作へとつながること

三

＜課題について＞
乳幼児の生活を意識し、乳幼児の視点に寄り添う目的で、普段の身近な生活の中で、あなたの心が揺れ動いた「もの、こと、現象、自然」などを探してみましょう（心動かされることの例：気づく、驚く、不思議だと思う、目に留まる、美しいと思う、じっと見たり触れたいと思った、誰かに伝えたい、表現したいと思ったなど）。乳幼児になったつもりで”感じて”みましょう。

図１　授業で提示した画像の一部（全て筆者による撮影）

段階２では、各自が心動かされた「もの、こと、現象、自然」の画像や動画およびその説明をアンケート①としてGoogleフォームより提出させた。写真もしくは動画の提出は、一人当たりの上限を２つに定めた。心動かされたものは、画像から視覚的に捉えられる情報に限らないため、自分なりに五感を意識して文章で表し、さらに自分がその場にいる乳幼児と想定し、保育者にどのように関わってほしいか、この２項目の記述を学生に求めた（表４）。

段階３では、段階２でGoogleフォームより提出された画像もしくは動画を、Zoomによるオンライン講義上で教員が提示し、学生は各自1〜1分半、口頭で発表を行った。クラスメイトの発表では、発表者の思いや心動いたことを“感じる”意識をするように指示をした。

段階４では、段階２で各学生が自分なりに表現した記述を資料にし、クラス全体にフィードバックを行った。また、「感性と表現」についての授業のまとめとしての講義（表３）を行い、授業後にアンケート②に取り組むことを課した。

表３「感性と表現」についてのまとめの講義内容

１）表現の芽を育む
・子どもは生活や遊びの中で、口ずさんだり、身近なものを振ったり、たたいたりし、心を動かす
・そのような何気ない行動の中に、子どもの“表現の芽”が隠されている
・乳幼児は周囲の人やものと関わりながら自分の気持ち（興味・関心、好奇心）を表す
→保育者は、乳幼児が示す「表現の芽」を大切に、共感的に汲み取っている
※音声、揺れる、じっと見るなど、”素朴な表現”であることも多い

２）「表出」と「表現」の意味
・乳幼児も美しいものを見たりすると、思わず声が出たり手足を動かしたり、自然発生的に声や動きがみられる
　このように無意識的・突発的に発せられる行動は「表出」だが、保育者は「表現」として捉えようとすることが多い
・心の内側にわいてくるような「感動体験」が欠かせない（感動自体は小さなことであっても）
→環境の中に、自然や人工的な素材など様々な感触や形、色、音、香り、味などがあり、子どもはそれらを感じ、学ぶ
→手に触れた時などに、興味関心からの子どもの表出があり、想いを伝えようと自分なりの表現が始まる
・子どもの『生きる在りよう』、子どもの存在を「表現」と受けとめる
　表し手の伝達意図の有無に関わらず、受け手がそこに伝達の意味や価値を見出すとき「表出」も「表現」になる

３）感覚から感性へ　”感覚”から”感性”が生まれていく
・子どもが物事を感じたり捉えたりするとき、五感やその他の感覚を通して外界を認知していく
・保育者は、”感覚”に働きかける活動を通して、子どもの”豊かな感性”を育むことが求められる

４）保育者に必要な感性、保育者のあり方が、子どもの感性を豊かにする
・聞く・見る・触れる・嗅ぐ・味わうなど、自らの感覚で外界と出合う
→「見て」と呼びに来て、感動を共有してもらいたい気持ち
→発見を共有・共感してもらう、自己表現を肯定的に受けとめられる経験　⇒子どもの感性と表現を豊かにする
・保育者は、普段から周囲の世界を大人の目からだけでなく、子どものような新鮮な視線で“感じ直す”こと、
　感動を素直に表現できるような態度を心がけることが大切
参照）レイチェル・カーソン（1996）『センス・オブ・ワンダー』「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではない

５）保育所保育指針、幼稚園教育要領における「子どもの感性と表現」に関わる記載

＜保育所保育指針＞
・第2章１（２）ウ　乳児保育　身近なものと関わり感性が育つ
・第2章２（２）オ　1歳以上3歳未満児　感性と表現に関する領域「表現」
・第2章３（２）オ　3歳以上児　感性と表現に関する領域「表現」
＜幼稚園教育要領＞
・第2章５　感性と表現に関する領域「表現」

2-2　アンケートの質問項目、回収率、集計方法

Google フォームにより実施したアンケート①およびアンケート②の質問項目を表４・表５に示す。回収数（回収率）は、アンケート①：112（98.2%）、アンケート②：112（98.2%）であった。アンケートフォームは、通信状況などの理由で２度以上同じものが送信されたデータは、同一のものを１つとカウントし、集計した（尚、受講者114名中、未提出の２名は、当該科目を履修したものの本講義への受講がなされず、当該科目の「感性と表現」を主題とする一連の流れについて不参加の状況である）。アンケート①は写真や動画の投稿と自由記述、アンケート②は問１、問２、問４（Ａ～Ｉ）は４件法、問３および問４（J）は自由記述とした。自由記述は単語もしくは短文にて項目化、KJ 法でカテゴリー別に集計した。

表４　アンケート①の質問項目

１）提出した画像（もしくは動画）の撮影状況（日時、場所）
２）提出した画像（もしくは動画）の場面で、あなたが感じたこと、気持ち、どのように心動かされたか。
あなたはその時、どのような表出（表情や姿勢、声や言葉）や表現をしたか。事実や現象のみに留まらず、自分が何を感じ、考え、イメージを持ったか、心身が満たされた、喜びや充実感、達成感があった、夢中だったかなどどのような気分か、その後、どのような表現や行動をしたか。見たもの、形、色、光、聴こえた音、言葉、感触、手触り、温度や湿度、香り、味、歯ざわり、気配、雰囲気など、あなたの全身の感覚（五感）を通した経験について、自分なりに文章で表すこと。また、その経験や思いは誰かに伝えたいと思ったか。
３）あなたが提出した課題の写真（もしくは動画）の場面において、あなたが”その場面にいる乳幼児”の想定で、保育者から援助されたり声をかけられたりしている姿を想像して下さい。あなたはどのように保育者に関わってもらいたいか。子どもが心を動かされたこと、子どもの発見や経験に寄り添う保育者の姿勢と併せて考え、文章で表すこと。

表５　アンケート②の質問項目

問１　段階２および段階３で、”子どもの感性の特徴”を感じることができたか 問２　段階２および段階３で、保育者や実習生としての子どもとの関わりを、自分なりに様々に考えることができたか
問３　段階３：「自身が心動かされたこと」を発表をし、他者の発表を聞き感じたこと、また、段階４：クラスメイトが書いた記述（①その場を子どもの感性を意識し、五感を伴うように表した文章、②”もしこの場にいる乳幼児なら、保育者にどのような関わりをして欲しいか”の記述）を読み、考え、気づき、感じたことを総合的に記述してください。

問４　段階1から段階４までの一連の学びについて A）現在（保育学生として）自分自身の"感性”について、どの程度豊かだと思うか B）実習生や保育者自身の「感性の豊かさ」は、子どもと関わるうえで大切だと思うか C）現時点で、保育現場で”子どもの感性”や”子どもの自分なりの表現””子どもの素朴な表現”を捉えて応じる、関わる、援助することについて、どの程度の自信があるか D）今後、保育現場で”子どもの感性”や”子どもの自分なり表現””子どもの素朴な表現”を捉えて関わることを向上していきたいと思うか E）今後、実習生や保育者として、今よりも自分自身の感性が豊かになっていくと思うか F）これまで経験した実習で、”子どもの感性と表現”について、どの程度意識していたか G）今後の実習で、”子どもの感性と表現”について、どの程度意識していきたいか H）今回、”子どもの感性と表現”の主題で学んだことを、今後の実習の場で、自分でも実践することができると思うか I）”子どもの感性と表現”を主題とした一連の学びは、新たな発見や気づきのある学びとなったか J）子どもの”感性と表現”についての学びを終えて、強く感じること、印象に残ったこと、気づいたこと、考えたこと、発見したこと、学んだこと、自身の変化などを文章にまとめてください。

＜経緯＞
・段階１：第11回授業：子どもの「感性と表現」についての授業および課題の説明
・段階２：各自課題に取り組む（アンケート①の実施：フォームへの写真（動画）および文章の投稿）
　　課題：日常のなかで心動かされるものを探し、その時の自らの感覚や表出、表現を振りかえり、自分なりに文章で表現する
・段階３：第14回授業（発表）：自身の心動かされたものを自分なりに表現する（他者の発表を聞く）
・段階４：第15回授業：クラス全員の段階２のフォームの記入内容のフィードバック、
　　子どもの「感性と表現」についての授業のまとめ、アンケート②の実施

2-3　倫理的配慮

Google フォームを用いたアンケート、課題として学生が提出した画像や動画および記述への教員による分析、授業での情報共有に関して、研究目的と内容、研究利用について、学生に文書および口頭で説明した。分析対象となること、担当教員による分析と研究での公開に差支えがある場合は考慮することを説明したが、該当する学生はいなかった。課題の写真については、なるべく不特定多数の人物の映る公共の場での撮影を避けるように説明を行った。提出課題の画像や動画の取り扱いについて、オンライン授業の受講における倫理事項（撮影や録画の禁止）について、注意事項を説明した。研究でのデータ分析、管理、発表では情報の取り扱いを徹底し、個人が特定されぬように最大限の配慮をすることを説明し、学生の同意、了解を得た。また、アンケート①および②での評定は、実習での意識などを問うものであり、自身のつけた４段階評定と成績評価とは直結しないことについても補足の説明を行った。

3　結果

3-1　アンケート①の結果

段階２のアンケート①における学生の写真（もしくは動画）の提出状況は、複数の写真もしくは動画を提出した学生が26名、動画を提出した学生（写真と動画、もしくは動画単体）が９名であった。提出した写真もしくは動画のカテゴリーは多岐に渡り、視覚的な情報のみで捉えきれないと考え、アンケート①問２の学生自身の記述とともに分析をおこなった。「撮影場所」は、道端など“近所”が41件（36.6%）、“学校”が30件（24.6%）、他、河川敷、山などであった。子どもの日常を意識して課題に取り組むように説明を行ったことや、冬休みの期間、コロナ禍での自粛の影響が少なからずあると推測する。「自然」では、“雪”に関することが36件（24.0%）で最も多く、他、空、雲、夕焼け、植物、落ち葉、山並み、星月、雨、地面（砂、土、霜柱、水たまり）、海、川などであった。「もの・こと」では、虫や植物などの“生物”が29件（60.4%）、他、鏡、糸、穴、電線などであった。「現象」では、夕暮れ時の空などの“色”が42件（20.8%）、肌に刺さるような冷えた空気、雪の冷たさなどの“温度”が38件（18.8%）、太陽の光に反射する雪の地面、物に光が当たってできた影といった“光や影”が33件（16.3%）、雪が積もった道に残る足跡などの“形や跡”が24件（11.8%）、波や風、雪を踏むなどの“音”が８件（4.0%）、“香り”が２件（1.0%）、その他、「○○みたい」「○○のような」という“比喩表現”が23件（11.4%）となった。エピソードとして捉えると「雪の降った１月のある日に学校で」という状況が27件（24.1%）と記載が多かった。また、アンケート問３の「あなたがその場面にいる乳幼児なら、どのように保育者に関わってほしいと思うか」については、以下の表６の結果となった。

表 6　アンケート①：問 3 の記述分析

カテゴリー		保育者に臨む関わりの文例	件数	計（件数）	割合（%）
A）時間を置かずに応じる	すぐに応じる	・見つけたことに対してすぐに応じてほしい ・真っ先に大好きな先生を呼んでいるため、すぐに見に来てもらいたい	20	20	3.0
B）十分な時間をとる、見守る、待つ	b-1)十分な時間をとる	・満足してその場を離れるまで十分時間をとってほしい　・一人で堪能する時間がほしい ・色々なことを感じ、色々な想像をする時間をとってほしい　・余韻に浸る時間をとってほしい	44	122	18.3
	b-2)子どもがその対象と十分に関わる時間を邪魔しないように待つ	・その時間を誰にも邪魔されずにひとりで噛み締めたい ・しばらくそのまま放っておいてほしい ・自分で発見したり気づきたいので、声を掛けずに待ってほしい	26		
	b-3)すぐに声をかけず、しばらく見守る	・最初に見つけて静かに見ている時は、話しかけずに見守っていてほしい ・保育者からすぐ話しかけるのではなく、子どもがその場を楽しむ姿を見守ってほしい	27		
	b-4)しばらく待って声を掛ける	・少し時間が経ったら「すごく綺麗だね」などと声をかける	10		
	b-5)子どもから言葉を発するまで待つ	・子どもから伝え始めるまで待ってほしい	2		
	b-6)保育者を呼びに行くまで待つ	・満足して自分から呼びに行くまで待つ　・「見て」と呼びに行くまで待つ	13		
C）同じ経験をする、そばにいる	c-1)ただ隣にいる、そばにいる	・そばにいてくれるだけで満たされるので、言葉はいらない ・まだ言葉で気持ちを共有するのは難しいかもしれないので、一緒に眺めるだけで良い	30	74	11.1
	c-2)子どもが関わっているものに保育者も関わる	・しっかり同じものを見てほしい　・一緒に観察してほしい　・隣で一緒に同じものを見てほしい ・保育者も一緒に関わって、不思議さや神秘さを味わってほしい	25		
	c-3)最後まで保育者がその場にいる	・途中でいなくならずに、最後まで一緒に見てほしい　・最後まで一緒の体験がしたい	19		
D）子どもの視点を探って寄り添う、共感、汲み取る	d-1)子どもの世界を探って寄り添う	・保育者から見た光景ではなく、何に見えるか、どんな風なのかを子どもに問いかける ・子どもの発想に大人が寄り添う　・子どもと同じ視点に立ち、保育者にも感じてほしい ・子どもの静かな心の動きに、保育者が寄り添ってほしい　・少しづつ探ってほしい ・大人の視点で決めつけないで、子どもの視点に寄り添ってほしい	44	152	22.8
	d-2)子どもの思いを汲み取り、代弁、言語化する	・言葉にならない思いを汲み取って代弁して欲しい ・自分の気持ちをうまく表現できない時、汲み取って言語化してもらうと嬉しい	8		
	d-3)感情や感動を一体になって分かち合う	・子どもの達成感や喜びなどを共有し、その時の気持ちを一緒に感じ合いたい ・同じぐらい一緒に楽しみ、嬉しい気持ちを一緒ぐらい感じてほしい ・自分と同じ熱量で保育者に一緒になって感動してほしい　・風や匂いなど一緒に感じてほしい	52		
	d-4)共感	・自分が興味を示したものに共感してもらいたい　・共感してほしい	33		
	d-5)しばらくして共感	・少し時間が経ったら「すごいね」「綺麗だね、○○ちゃん」などと声をかけてほしい	3		
	d-6)子どもが言葉を発してから共感	・視覚的な感想を伝えると思うので、それを聞いてから、共感して言葉を返してほしい	12		
E）受容、肯定	e-1)受容、肯定	・素直な感想を受け止めてほしい　・遮らずに最後まで話を聞いてもらいたい ・肯定的な言葉を掛けてほしい　・うまく話せなくても受けとめてほしい	24	33	4.9
	e-2)非言語的な受けとめ 笑顔、目線、姿勢	・笑顔で目線を合わせて話しかけてほしい　・一緒の目線になってほしい ・子どもの視線に合わせてしゃがんで話し、同じ目線になってほしい	9		
F）褒める、認める	褒める、認める	・「よく見つけたね、すごいね」と褒めるような声をかけてほしい　・すごいねと褒めてほしい	11	11	1.7
G）子どもの捉えた世界を広げる	g-1)子どもがたくさん話せるようにする会話を広げる	・子どもがたくさん話せるように　・心を開いて話せるように　・会話を広げられるように ・子どもが話の主役になる　・話を膨らませてほしい	42	167	25.0
	g-2)子どもに質問をする	・子どもに質問をする	21		
	g-3)子どもがたくさん考えられるようにする	・子どもがたくさん考えられるような関わり　・自分で考えられるような質問や声かけ ・子どもの考えが広まり、自分の意見を言いやすくする関わり	18		
	g-4)興味が広がるような関わり	・色や光、季節に興味をもてるように　・どうして？と興味がわくように ・その興味がより長期的になるような声かけや行動をする	20		
	g-5)想像が広がるような関わり	・想像が掻き立てられるように声を掛ける	18		
	g-6)意欲が湧くような関わり	・もっと知りたい、関わってみたいという意欲がわくように関わる	3		
	g-7)豊かな経験になるような関わり	・五感やこれまでの経験とつなげる声掛け　・さらに豊かな経験になるように引き出す	45		
H）人との関わりにつなげる	h-1)クラスの子どもたちにも伝えて共有	・味わったことや達成感などをクラスの子どもにも認めてほしい ・その子の発見を他の子にも共有しようと保育者が近くにいた子どもに声をかける	15	18	2.7
	h-2)子どもの家族にも見せる、伝える	・保護者にエピソードを伝えてほしい	3		
I）表現や活動につなげる	i-1)表現や創作の活動につながるようにする	・自分でも作ってみたくなるような声かけや提案をしてほしい ・自分で表現や創作したくなると思うため、素材を置いてほしい	8	23	3.5
	i-2)関わりのある活動につなげる	・興味を持ったものについての絵本を読んでほしい　・遊びにつなげてほしい　・提案してほしい	15		
J）保育者の見解を伝える	保育者の捉えたこと、感じたことを話す	・「先生は○○に見える」など世界観や感じたことを話してほしい　・先生の反応が知りたい ・子どもの世界が広がるから、保育者がどうとらえたのか話してほしい	12	12	1.8
K）教える、調べる、知識が増える、理解が深まる	k-1)教える	・（仕組みや生き物との関わり方など）そっと教えてほしい　・疑問に答えてほしい	12	19	2.9
	k-2)一緒に調べるなど、知識が増える、理解が深まる	・保育者の言葉を受け、自分で考えたり調べることで、理解が深まる ・一緒に調べる（図鑑を見るなど）	7		
L）記憶に残す、思い出して語る	l-1)その時より後に体験を思い出す	・後日、思い出して話したい　・一日を振り返って、その時の体験を思い出して保育者と話したい	6	15	2.3
	l-2)記憶に残るようにする	・成長した時に記憶に残るものになるようにしてほしい　・写真や文章に残しておいてほしい	9		
				総抽出数666	
				学生1人平均5.2単位	

総抽出数 666、学生 1 人平均 5.2 単位、12 の大カテゴリーとなった。「あなたがその場面にいる乳幼児なら、どのように保育者に関わってほしいか」について、カテゴリー G「子どもの捉えた世界を広げる」関わりについての記述が 167 件（25.0%）と最も多かった。なかでも g-7 の「見る、聞く、触れるといった五感を伴った豊かな体験」となる、子どもの既存の知識とつながるような関わりが 45 件と多く、次いで g-1「子どもがたくさん話せるようにする」が 42 件、さらに g-4、g-5、g-6 のように「子どもの興味や想像が広がる、意欲が湧く」といった関わりが挙がった。次いでカテゴリー D「子どもの視点を探って寄り添う、共感、汲み取る」が 152 件（22.8%）となり、なかでも d-3「感情や感動を一体となって分か

七

ち合う」が52件、d-1の子どもの視点に立ち「子どもの世界を探って寄り添う」が44件、d-4、d-5、d-6を合わせて「共感」が48件となった。続いてカテゴリーB「十分な時間をとる、見守る、待つ」が122件（18.3%）となり、b-1のように子どもが集中したり考えたりしながら十分に対象と関わる「時間を十分にとる」ことに関する記述が44件、b-2「保育者が子どもの時間を邪魔せずに待つ」およびb-3、b-4、b-5、b-6にように「保育者がしばらく待つ」が合わせて70件となった。他、カテゴリーC「同じ経験をする」が74件（11.1%）、カテゴリーE「受容、肯定」が33件（4.9%）、カテゴリーIの絵を描く、絵本など「表現や活動につなぐ」が23件（3.5%）、カテゴリーK「教える、調べる、知識が増える、理解が深まる」が19件（2.9%）、カテゴリーHのクラスの友達や子どもの家族など「人との関わりにつなげる」が18件（2.7%）、カテゴリーA「時間を置かずに応じる」が20件（3.0%）、カテゴリーL「記録に残す、思い出して語る」が15件（2.3%）、カテゴリーJ「保育者の見解を伝える」が12件（1.8%）、カテゴリーF「褒める、認める」が11件（1.7%）となった。保育者がすぐに子どものそばに来て声を掛け、保育者の思いや捉えたことを伝えるより、子どもが対象と関わりながら五感を通して感じる時間を十分にとり、その間、保育者は見守ったり、傍らに存在しながら子どもが満足するまで待ったり、子どもが捉えたことを子どもの視点で寄り添えるように子どもの世界を探りながら感じ、子どもの心の揺れ動き、感動や感情を分かち合い、さらに子どもの経験が豊かになるような援助を考えたということがわかる。

3-2　アンケート②：問1および問2の結果

アンケート②の問1・問2の結果を表7に示す。問1「子どもの感性を感じること」が“とてもできた”と“まあまあできた”を合わせて計96.4%、問2「保育者や実習生としての子どもとの関わりを自分なりに考えること」が“とてもできた”と“まあまあできた”を合わせて計97.3%と、学生の回答では「できた（とても・まあまあ）」という自覚が9割を超えた。

表7　アンケート②：問1および問2の結果（数値は%）

	とてもできた	まあまあできた	あまりできなかった	全くできなかった
問1	58.0	38.4	3.6	0.0
問2	42.9	54.4	1.8	0.9

3-3　アンケート②：問3の結果

アンケート②の問3、学生の記述の抜粋を表8に示す。子どもの感性と表現、保育者の関わりについて具体的に捉えたことがうかがえる。子どもが五感から捉える世界と表現の特徴（学生1、4）、子どもの感性と表現における個々の違い（学生3）、心を動かす体験の大切さ（学生1）、子どもにとって嬉しい関わりや子どもの気持ちの尊重（学生1、2、10、12）、子どもの生きる姿を受け止める関わりなど保育者の援助における気づきや学び（学生1、5、8、11、12、13、14、15）、保育者の職務の喜び（学生2、12）といった記述がみられた。子どもを主体に保育者の関わりを考えていることがわかる。また、発表および他者の提出文章を読むことで、自他の捉え方や表現の特徴および個々の違いへの気づき（学生7、9、11）より発展し、子どもも個々に感性と表現が異なるということへの理解や保育者の援助を考えることにつながっている（学生3、4、6、8）。表1記載の目標が、学生の学びの姿として記述に表れている。

表 8　発表およびクラスメイトの提出文章を読んでの学生の記述の抜粋（考え、気づき、感じたこと）

学生1	発表では主に色や形などの視覚的な表現が多く、一番最初に反応するのは視覚が多いと思った。見ているものが一緒だと子どもに共感しやすい。自分の記述にも視覚的な要素が多くあった。子どもは、じっくりと観察して楽しんだり、匂いを嗅いだり、実際に触って感触を確かめたりして遊びたくなると思う。五感を少しずつ取り入れていくと話が盛り上がっていくと考える。子どもの思考が広がること、子どもの思うことを聞いて保育者が応じることが大切だと気づいた。思ったことを素直に伝えてくる子もいれば、なかなかうまく伝えられない子もいる。大人目線の世界観と子ども目線の世界観は違うため、大人の価値観を押し付けることのないよう、子どもの気持ちを尊重していくことが大切だと感じた。多くの人が、子どもの気持ちに寄り添う保育者の関わりを重要視しており、授業での学びが反映されている意見が多かった。子どもと目線や気持ちを共有し、同じものを見て心を動かす経験の大切さを感じた。子どもの見た世界を壊すことなく寄り添うことで子どもの世界をさらに広げ、のびのびと遊びを楽しむことができるのではないかと感じた。
学生2	クラスメイトの文章に「静かな波音とゆっくり沈んでいく夕日に少し寂しさ、切なさを感じた」とあり、視覚、聴覚を通しての感情が表れていて、喜んだりはしゃいだりしているわけではなく、しんみりとしており、保育者には、その世界観を崩さずに横に静かに寄り添って欲しいと感じた。大人になったらなかなか見つけることのできないようなものを見つけて表現をしたりと、どこまでも広がる感性を見ることのできる保育者という仕事は、間接的に発見を楽しめる職業なのではないかと考えた。
学生3	似たような写真を課題で提出した人たちが何人かおり、「景色」をひとつの大きな括りにして考えるともっと大勢が似ている写真だったが、思うことや感じたことが人それぞれだった。このことから、乳幼児もきっと、同じものを見ても感じ方や捉え方がそれぞれあるのだろうと思った。
学生4	もし私が乳幼児だったら、自分が疑問に思っていることに対して保育者から返答されて終わるのではなく、最終的に自分で考えて決められるような関わりをしてほしいと感じた。そして、人の数ほど性格などがあるように、人の数ほど「心動かされたこと」もこんなにも違うのだと気づくことができた。子どもの頃は、何もかもが新鮮で日常に潜む小さなことに対して感動したり興味を持つことができる、それが子どもの特徴であると感じた。
学生5	様々なものと関わる中で子どもが気付いたり感じたり考えたりすることに対してその姿を受け止め表現したくなるような環境づくりと言葉がけの工夫が大切だと感じた。感じたことを保育者と共有するのではく、自分だけで感じたいという子どもも存在する。そんな時は子どもを見守ることも大事だと思った。この課題に取り組み、子どもの時の色々な記憶が蘇ってきて楽しかった。
学生6	普段、景色を見たり日常の何気ないものを見ても、綺麗といった感想は出てくると思うが、何かのように見えると想像してみたり、周りの人と意見を言い合い、そのことについて深く話してみる機会は少ない。今回の課題を通じて、クラスメイトがどのような感性を持っているのかを知ることができてよかった。同じ画像を見ても違う感想を持つものもあり、思いを共有できたことがとても良かった。子どもと話していると、さらに興味深い子どもの感性を感じることができると思い、今回の学びを保育において大切にしていきたいと思った。
学生7	友達の文章を読んでみると、発表の際に見た写真のイメージと少し変わることがあった。写真一つとっても、その写真の情景や雰囲気などの見え方は人それぞれで、他の友達のその写真への感じ方を見てみるととても新鮮で面白かった。発表で友達の写真を見た時よりも、その友達の説明を聞き、提出時に書いた文章を読んだ後で写真を見た時の方が、とても大きな感動があった。写真に写っていない周りの景色、天気、風の気持ちよさ、人の表情など、その時のすべての条件がそろって、その友達は感動したのだと分かった。
学生8	一人ひとりの感じたこと、考えたこと、気づいたこと、それを文章として表現したもの、ひとつとして同じものはないし、それぞれの感性が垣間見れたような気がした。子どもたち一人ひとりがどのように考えているのかが分からないため、子どもの没頭している様子や誰かを探しているような様子、保育者が近づいた時の表情などをよく見て関わる必要があると感じた。保育者としてどのように関わっていくのが正解なのか、そういうことは自分自身の保育ではあるが、子どもが自分で何かを考え、それを援助する面では、皆の考えは根底では似ていると思った。
学生9	クラスのみんながそれぞれ違う感性を持っていて、一人一人の発表を聞いて心が動かされていった。自分にはなかった感性に気付き、自分にはなかった発想を知った。また、クラスメイトの感性について、五感を伴うように表現した各自の文章を読むことで、自分なりに解釈していたことと相手の思いの違いに気付くことができた。課題に取り組み、日常の中で子どもの感性を意識することで、普段気付かなかった自身の感覚に気付くことができた。
学生10	他者の発表を聞いたり、他者の文章を読むなかで、子どもが感じたことや想像、感動を、子どもと関わるなかで引き出していったり、気持ちに寄り添うような関わりをすることが良いのではないかと思った。まだ拙い言葉かもしれないが、その場で感じたことを一生懸命に話すなかで共感してもらえると、子どもはとても嬉しい気持ちになると思う。忙しいときもあるが、保育者が一瞬手を止めて、子どもが見たものを共に見て、その感情を分かち合えると、子どもは嬉しいと感じることを実感した。
学生11	クラスメイトの文章に「心なしか音楽が聞こえてくるようだ」といった表現があり、とても綺麗だと感じた。自分にはない感覚を体験することができた。他にも、そんな視点もあるのかと驚かされるものもあった。音が聞こえなくても、クラスの友達の説明だけで、音を想像することができ、とても面白い時間になった。さらに、子どもとの関わりの点では、まずは子ども自身が対象となるものをじっくりと観察したり、自分で考えたりすることも大切だと改めて気付かされた。ゆったりと関わることも、子どもたちの心の豊かさを培うには必要なことだと思った。
学生12	子どもの感性は、大人が決めつけたりするものではなく、子ども自身が自由に感じたりすることだということを改めて知ることができた。子どもは保育者と共有すること、自分と同じ気持ちになってもらうことで、より喜びを感じるのかもしれないと思った。いつもと違う天気に気づいたり、雪が積もっていたり、それに気づくことだけでも子どもにとっては素敵なことだが、さらにそれらを保育者と共有することで、さらに子どもの感性は育まれると思う。日々、そういった交流ができるのが保育の素敵なところだと思った。
学生13	いつもはなかなか気づくことのできない小さな出来事も、今回のように子どもの感性で捉えるつもりで意識を向けると、様々なことを感じたり刺激を受けたりすることができ、さらにそれを自分なりに表現し、周りの人と共有することはとても素敵なことだと思った。五感を通して感じることは、子どもはもちろん保育者になる私たちにとっても、とても大切なことだと感じた。もし私自身がこの場にいる乳幼児だとしたら、保育者には五感を通して出てきた言葉をたくさん話して、感動を伝えて分かち合ってほしい。
学生14	他者の文章を読み、それぞれが感じた「楽しい」や「綺麗」など、心が温かくなる表現がたくさんあると感じた。実習生、保育者として、子どもの生きる姿を受け止める関わりが大切なのだと改めて感じた。子どもの目線になって心を動かされるものを見つけると、保育者として子どもにどのように関わっていきたいかを考えられるようになっていくと思った。保育者の目線と子どもの目線、どちらからも捉えられるようにすることが大切であると考えた。
学生15	子どもの感性を捉えるために五感を伴うように表現した他者の文章では、見たものを純粋に楽しみ、感じ、そこからさらに想像を広げていて、一人ひとりの感性の豊かさを素敵だと感じた。また保育者にどのような関わりをして欲しいかについては、静かに見守ってもらいたいという意見が見られた。子どもが心を動かされている時、保育者側があれこれ言いすぎてしまうと心の動きの妨げになってしまうこともあると気づいたため、子どもの気持ちを静かに受け止める保育者の姿も忘れてはいけないと思った。直接的に働きかけることだけが援助ではないと気づくことができた。

3-4　アンケート②：問 4（質問項目 A ～ I）の結果

段階 1～4 までの一連の学びについて尋ねたアンケート②問 4（質問項目 A～I）の結果を表 9 に示す。

表 9　アンケート②の問 4（質問項目 A ～ I）の結果（数値は%）

九

	とても	まあまあ	あまり	全く
A	16.1	64.2	17.0	2.7
B	92.9	7.1	0.0	0.0
C	3.6	49.1	45.5	1.8
D	86.6	12.5	0.9	0.0
E	69.6	29.5	0.9	0.0
F	13.4	47.3	38.4	0.9
G	90.2	9.8	0.0	0.0
H	42.0	56.2	1.8	0.0
I	80.4	18.7	0.9	0.0

問Ａ「現在の自分の感性の豊かさの自覚」では、“とても豊か”“まあまあ豊か”で計80.3%となった。問Ｂ「子どもと関わる実習生や保育者の“感性の豊かさ”の大切さ」では、“とても大切”“まあまあ大切”で計100%となった。問Ｃ「現時点で、保育現場で“子どもの感性と表現”を捉えて関わることの自信」では、“とても自信がある”が3.6%と少なく、“自信がある（とても・まあまあ）”“自信がない（あまり・全く）”で半数ずつの割合となった。問Ｄ「保育現場で“子どもの感性と表現”を捉えて関わることへの向上の意欲」では、“とてもそう思う”“まあまあそう思う”で計99.1%となった。問Ｅ「実習生や保育者として今より感性が豊かになるかの見解」では、“とてもそう思う”“まあまあそう思う”で計99.1%となった。問Ｆ「これまでの実習での“子どもの感性と表現”の意識」では、“とても意識してきた”が約13.4%と少なく、“意識してきた（とても・まあまあ）”“意識してこなかった（あまり・全く）”で半数ずつの割合となった。問Ｇ「今後の実習での“子どもの感性と表現”の意識」では、“とても意識していきたい”“まあまあ意識していきたい”で計100%となった。問Ｈ「“子どもの感性と表現”が主題での学びを今後の実習で実践できるか」では、“とても実践できる”“まあまあ実践できる”で計98.2%となった。問Ｉ「“子どもの感性と表現”が主題での学びは、新たな発見や気づきがあったか」では、“とてもそうである”“まあまあそうである”で計99.1%となった。

“子どもの感性と表現”について約４割が実習で意識をしてこなかった（問Ｆ）が、約８割が一連の学びで新たな発見や気づきがあったという自覚（問Ｉ）であり、実習生や保育者の感性の大切さを全員が感じていた（問Ｂ）。自身の感性について約２割は現状豊かではないと感じ（問Ａ）、子どもへの援助について約５割は現状自信がもてない（問Ｃ）が、今後、実習で実践できる（問Ｈ）、今後の実習で意識し（問Ｇ）、向上したい（問Ｄ）、自身の感性も豊かになる（問Ｅ）と約９割が感じたということがわかる。

3-5　アンケート②：問４（質問項目Ｊ）の結果

アンケート②の問４（質問項目Ｊ）の記述の抜粋を表10に示す。学生なりの学びの実感を伴った記述が散見された。今後の実習や保育現場を見据え、具体的な保育者の関わりについての記述が多数みられた。「保育現場での実践についての自己課題や目標」としては、子どもとの関わりでの自身の目標や自己課題（学生20、21、24、31、38、40）、子ども観（学生22）、目標とする保育者像や保育観（学生20、22、24、25、27、28、34）、保育者の職務の役割や喜び（学生24、34、37、38）についての記述が見られた。また「乳幼児の特性の理解とその関わり」としては、心動くことや感動体験の大切さ（学生24、29、32、33、35、38、39）、直接的な体験で五感を通して外界を捉えるという子どもの特性（学生16、18、28、33、35、36、38、39）、子どもの感性と表現の特徴（子どもの素朴な表現、言葉以外の表現）と個々の違い（学生16、18、21、23、25、26、27、28、29、32、33、36、38、39）、子どもに応じる保育者の姿勢や態度など具体的な関わりとその影響（学生17、18、19、21、23、24、25、26、28、29、30、32、33、34、35、36、37、38、39）、環境（学生16、19、21、26、35、36）、子どもの世界を“感じる”ことや大人が“感じ直す”ことの大切さ（学生25、32、38）についての記述がみられた。また、自他の捉え方や表現の違いとその多様性（学生27、30、31、40）、他者の良さ（学生17、31）、学びや情報共有の意義など肯定的な意見（学生30、31、34、35、37、40）についての記述が見られた。表１の到達目標や、各段階の目標に記載の事項が、学生の記述に表れている。

表 10　一連の学びでの記述の抜粋（感じる、印象に残る、気づいた、考えた、発見したこと）

学生16	園での生活で、私たちが感じたものに加えて、もっと細かな水の流れ方や砂場の土の力を加えた時の硬さの変化、見つけた生き物の不思議などにも子どもは心が動いているのではないかと考える。子どもの立場となって考えることで、保育教材や環境構成などの全てが繋がっていると改めて感じることができた。
学生17	保育者が寄り添ってくれることが子どもにとってどれだけ大きなことかを感じた。大人の価値観を一方的に押し付けず、子どもにとってどうかを理解することが大切だと思った。この授業では特に「こんなことを考えてくれる保育者が近くにいたら子どもは嬉しいだろうな」と思うことがたくさんあった。
学生18	子どもたちの物事に対する着眼点は鋭く、大人になってから表現することが難しい発想であれこれと伝えてくれると感じる。子どもはきっとこう思うのでは、こういう視点で見ているのではと、限りなく子どもに近い感覚で考えることは可能だと思う。意識するほど、子どもが何かを報告してくれた時に、より深く子どもの気持ちに寄り添うことができるようになると考えた。
学生19	保育者の関わりで、子どもの考えをどのように尊重し、子どもの感性をどのように育むかは変わってくる。そこにある事実だけを伝えるのではなく、子どもの想像が広がるような、何かに例えた表現で話してみたい。子どもが感覚を楽しむことができるような声掛けや環境で、子どもの世界を広げたい。子どもの感性を育むために、まず大人である私たちが「子ども心」を持って生活していくことが重要だと思った。
学生20	子どもの感性で物事を見てみると、普段の日常生活の中でも感動する場面があったり、たくさんの発見があるということが改めてわかった。身の回りの音や匂い、雲の様子、風の速さ、植物の形など、見れば見るほど身の回りには素敵なものが溢れていた。子どもが自分らしさを表現できるように保育の中で様々な工夫をしたい。一人一人の感性を肯定して子どもと関わっていきたいと新たに目標を立てることができた。
学生21	「感じたこと」の表現は個々の子どもで異なること、子どもは全身から思いが表れていることを学んだ。保育者として子どもが伝えやすい雰囲気を作りたい。子どもの豊かな感性と表現は、感性的な出会いがある環境と保育者の言葉掛けによることから、保育者にも豊かな感性が必要なため、自分自身も積極的に外に出向いたり、身近な日常の中に綺麗だと思うことなどを感じ取りながら生活していきたい。保育者としての感性の豊かさは、子どもの環境を作る者として必要だと感じた。
学生22	一年間、様々な授業の中で子ども主体や子ども中心の保育などたくさん聞いて学習してきた。しかし、この「子どもの感性と表現」の勉強をしたからこそ、その保育の大切さに気づかされた。小さな子どもの発見、子どもの目線だからこその考え方などを知ることが、子ども主体の保育ができる秘訣だと思った。授業を通して子どもの視点に "なって' '物事を考えてみることで『子ども観』をより感じることができるようになったように思う。
学生23	これまで目の前にいる子どもに対して保育者としての正しい援助や対応ばかりに目を向け、私自身もそこを中心に学ぼうとしていたことが多かったが、保育者は子どもの内面に一番近くで触れる大人であり、だからこそ些細な子どもの感性や感情を読み取る心理的な面での力が必要になるという考えに大きく変わった。子どもの素朴な表現を大人が一緒になって感じることや、乳児には言葉にならない表現や素朴な表現を意識して保育することが大切だということを学んだ。
学生24	改めて自分のなりたい保育者の姿やこのような保育がしたいという考えが具体的になった。子どもの心が動くこと、その瞬間に携わることが保育者の喜びである。保育者とは、いつまでも子どもから学び、自分自身が成長できる職業だと思った。子どもの心が動いた瞬間を大切に、子どもの心の動きにきちんと気づいて援助できるようになりたい。子どもの小さな喜びに気づけるためにも、日頃から私自身が心動くことを体験し、豊かな感性でいることが保育者として必要だと思った。
学生25	感性を育てるためには「感じること」が大切だと感じた。実際に実物を見たり触れることで、初めて何かを「知る」ことになる。「感じる」という経験が、絵に描いたり、折り紙や粘土で作ってみたりといったその子なりの表現へと繋がっていく。様々な方法で表現する場を保育者が用意することも大切だと感じた。その子どもの持つ感受性、感性の豊かさを更に広げていくために、子どもが自分の気持ちを伝えたり表現できるように、あたたかな人間関係の中で子どもの表現への意欲を保育者が受け止めることが大切になると学んだ。保育者自身も子どもの目線に立ち、新鮮な思いで世界を感じ直すことで、子どもの感動に素直に共感することができる。子どもが見たものや感じたものに同じ目線になって楽しめる、そんな保育者になりたい。
学生26	子どもによって感じ方は様々であり、関わり方は一つではない、ということがとても印象に残り、これからの保育活動等において心に留めておきたい。静かに見惚れていたり、素朴な表現だったり、表し方も様々だと学んだ。保育者の関わりというと何より声掛けの印象があったが、そっとそばにいる関わりもあると学んだ。保育者の関わり方で子どもの感じる幅も大きく変わるため、一人一人を理解して関わることや、子どもが色々と感じたり考えられる環境を保育者が準備したり、子どもが感じたことに気付く力、肯定的に受け止めていくことが保育者にとって大切だと感じた。
学生27	子どもの感性を大切にするような保育をしたいと思った。課題を通して、人によって感じることや考えることがかなり違ったことに驚いた。大学生の私たちでも感じるのだから、子どもはもっと多種多様な考え方があると思う。一人一人の小さな変化や何気ない一言を見逃さずに受け止めて、子どもの感性を考えてみたい。
学生28	子どもは五感を最大限に使って物事を体験しているとわかった。保育者が一緒になって見つめることで、子どもたちが感じる美しさはもっと心に残る美しさになっていく。子どもの行為のひとつひとつにその子の「今」が込められていると知り、美しさに向き合う子どもに私も向き合い、さらに感性を高められるようにしていきたい。友だちや保育者に伝えたり、お母さんやお父さんにその喜びを表現できる、そんな保育をしたい。
学生29	子どもは思いを何でも口にすると捉えがちだが、時にはその感動体験を自分自身で噛み締めたり、言葉ではない方法で表現したりすることがわかった。課題の中で自分自身も、心が動いたものへの保育者からの関わりでは、感動を安直に同意してもらうのではなく、まずはひとりで噛み締めたいと回答した。自分が感じた世界をまずはひとりでじっくりと味わってから表出する。じっくりと味わっている過程で話しかけられることで、時に味わいは遮られてしまうのかもしれない。子どもの気持ちを汲み取って代弁することは大事だが、それはその時の状況と子どもの心の状態を加味してするべきことだと強く思った。
学生30	子どもの感性はとても奥深く、大人が子どもから学ぶことが多いということを改めて感じた。保育者になった時には、子どもの感性に一番に気づいて伸ばしていける存在になれるように、常に子どもの目線に立つこと、自分が子どもだったらどうしてもらえれば嬉しいのか、心に残ることができるかということを意識しようと思った。私たちが子どもの気持ちを想像して発表することで自分とは違った意見が見えてきて、他人の意見から学ぶということはこういうことかと改めて思った。
学生31	授業を通して、人それぞれ感性・表現が違うことを強く感じた。想像していた以上に違う感性で、様々な考え方に出会えてとても楽しく感じた。こんなにも色々な感性を持っている保育者がいたら、もっと豊かで素敵な感性が子どもたちから生まれてくると思った。実習では子どもと関わり、その子の感性に触れていきたい。
学生32	「感じる」ことの大切さを深く考えながら子どもと関われていなかった。「感じる」ことの大切さを学び、子どもたちの発見をより大切に思えるようになった。子どもならではの感じ方や表し方があることを学ぶことができた。大人にとっての当たり前を押し付けるのではなく、子どもの考えを尊重できたら素敵だと思う。
学生33	子どもの小さな表現を汲み取ることが大切と分かった。子どもの表現は、表現しようとして現れるのではなく、生きる姿、存在が表現である。ことばだけではなく動きや表情にも表れるため、子どもの表現を読み取り、受け止める姿勢が大切である。小さくても子どもの感動体験を作れるように配慮することも大切と感じた。感じていることを言葉を介して共有することで子どもの感動はより深くなる。子どもが自分で何かに気づいたり、感動したり、疑問に思うことが大切と学んだ。
学生34	子どもたちと心の動きを共有することもとても楽しみになった。保育者は子どもの感性と表現を伸ばす重要な仕事で、改めて一人一人の個性を見抜く力が必要だと感じた。授業で学んだ知識と自分自身の感性の豊かさも大事だと思った。感性を育む大事な時期に、感じる経験をたくさん子どもたちとしていきたい。全員に同じ対応をするのではなく、その子にあった対応をしていきたい。日々の生活の中で子ども自ら色々なことを発見し、自己発揮できるような援助をしたい。
学生35	子どもの感性について考えることで、子どもの立場になって考えること、子どもに寄り添うとは具体的にどのようなことなのかを考えるきっかけになった。子どもが自ら発見できる環境を整えることも一つの寄り添いの形だと考えた。一つ一つの感動や発見を大事に子どもに寄り添いながら保育していくことを大切にしたい。
学生36	身近なものに主体的に関わることが子どもの感性を育てるということを学んだ。子どもが主体的に関わりたくなる環境を用意し、言葉掛けでより興味を持てるようにする必要があると感じた。心を動かされる対象には、音、空間、空気の質、理由はわからないが心地良いと感じたものなどもあるため、たくさんのものごとに触れられる環境が必要だと思った。子どもの感性は大人とは少し異なる豊かさがあり、純粋にそのもの自体だけを対象として感じることができると思う。言葉だけでなく仕草や表情などで伝えてくれる子どもたちに寄り添い、汲み取って言語化することで、子どもなりに表現し、豊かな感性につながるのではないかと思う。
学生37	自分が見て感じたことを話せる人や聞いてくれる人、様々な出来事について話を通して共有してくれる存在がいることは大事だと感じた。自分が話したことに共感してくれたり楽しそうに聞いてくれるだけでとても嬉しい気持ちになり、もっと話したいと感じ、子どもたちが身近で起こったことについてとても熱心に伝えてくれていたのはこういう気持ちからなのかと思った。課題を通して、発表し、他者の発表を聞いて共感する時間は、とても大切な時間だと思った。
学生38	子ども自身が五感で自ら心動いたものに出会っていくのを促進したり、「見て」と呼びにきて、感動を共感してもらいたい気持ちが見られたらそばに行き、大人の固定概念を捨てて想像力豊かに関わることが大切だと感じた。保育者は、普段から周囲の世界を大人の目からではなく、子どものような新鮮な視線で “感じ直す” こと、感動を素直に表現できるような態度を心がけることが重要だと感じた。また、子どもが発見する美しさを保育者も見つめて再発見することも重要で、普段から周りに目を向けて心動く経験を重ねたいと思った。自分の感性が子どもたちの感性と一致したら素敵だなと思う。
学生39	子どもは何気ない日常の中で心を動かし、様々な感情を抱き、誰かにそれを伝えたいと思い、言葉や行動に出ることがわかった。子どもの頃の感動体験は、小さなことでも欠かせないものであり、それを通して自分なりに表現できるようになり、感性が育まれる。自分の気持ちを他者へ伝えることに満足し、自ら感動体験を探そうという気持ちになり、感性が豊かになっていく。保育者は、子どものありのままの姿を受け止め、子どもの伝えたいことに共感し、感動を素直に表現できるような態度を心がけることが大切だと感じた。子どもの世界に溶け込み、五感で子どもの感性を感じていくことが最も重要だと考えた。子どもの頃の気持ちを思い出し、より子どもを主体として感じ、理解することができるようになると思った。
学生40	他者の感じたことを表現した文章を読み、自分と似ている表現を見つけたり、自分にはなかった感性や表現に気づくことができ、自分一人だけではなく色々な人の感性や表現を知ることも大切だと思った。感性や表現が違うことは分かっていたが、予想以上に色々な考え方に出会えて楽しかった。保育者として、子どもや他の保育者の感性に触れ、自分自身の感性をより豊かにしていきたい。実習の際にはたくさんの子どもと関わって感性に触れ、遊びを通して感性を共有していきたい。

4　考察

本調査の概要の到達目標（表1）と調査結果を照合し、「感性と表現」についての学びの実態と教授内容の検討を行うとともに、心理科目としての「感性と表現」の教授内容における可能性について示唆する（以降、説明の都合上、アンケート①を「A①」、アンケート②を「A②」と示す）。

4-1 「感性と表現」についての学びの実態、心理科目としての教授内容の検討

結果3-2（表7）および結果3-4（表9）に示したように、「子どもの感性を感じること」「保育実践での自己課題を考えること」が“できた”という学生の自覚が9割を超えたという結果から、一連の授業実践により、学生に一定の学びの自覚をもたらしたと推測する。加えて、A①問3（表6）の分析において、共感や受容、子どもの世界を広げるなどの保育者の具体的な関わりの記述がみられたこと、A②問4-Iで99.1%の学生が「気づきと発見のある学びであった」と回答し、A②問4-J（表10）で自他の違いなどの気づき、保育者としての具体的な関わり、学びが将来の自身の保育者像につながったなどの記述がみられたことから、学びの意義や理解の深まりにおいて一定の効果があったと推測する。

結果3-1（A①問3：表6）および学生が提出した「身近な生活のなかで心動いたもの、こと、現象、自然」の分析、結果3-3（A②問3：表8）、結果3-5（A②問4：表10）において、「身近な環境と十分に関わる」「心を動かす」「感動を共有する」「様々に表現する」「色や形、音」などの保育所保育指針に記載の文言や授業内容を捉えた記述が散見され、「直接的な体験、五感を通して学ぶという子どもの特性」「素朴な表現」「その子なりの感性と表現」「子どもの世界を感じること、探って寄り添うことの大切さ」といった本調査の概要（表1）に記載の到達目標や各段階での目標に関する記述が散見されたことから、「感性と表現」についての学びにつながったことがわかる。個々の学生なりに保育者の援助を具体的に思い描くとともに、今後の保育実践での自己課題について触れる記述がみられた。

このように一連の学びが、子どもの理解や保育者の具体的な関わりを考える一助となり、今後の保育実践へと意識がつながったことが読み取れる一方、結果3-3に記載の通り、「保育者の感性の豊かさ」の大切さを実感するものの、現時点では子どもの「感性と表現」を意識した援助や、自身の感性において自信を持てず、今後、経験を積み、子どもとの関わりを重ねるなかで向上していくと感じている結果となった。乳児や低年齢児との関わりをもつ初めての保育所実習が迫る時期の調査であり、経験が浅い段階での主観的な実感としての数値であることは否めない。とりわけ、到達目標②にある子どもの“素朴な表現”の具体的な姿とそれに応じる保育者の関わりについて、その必要性を理解する記述が多々あるものの、乳児の表出の姿とそれに対する実践についての理解はまだ十分ではないと推測する。

4-2　心を動かされる対象と十分に関わるということ、感覚から感性へ

結果3-1の通り、すぐに子どもに声を掛けず、子どもの発見を見守り、心を動かされた対象を五感で感じる時間を十分にとるような保育者の関わりについての記述が多くみられた（A①問3：表6、カテゴリーB）。乳幼児期の学びは、直接的な体験、五感を通して感じることから始まる。環境に対して、面白さや不思議さを感じ、心を動かされながら確認する。心動かされる対象に十分に関わるなかでその

子どもが感じることは、その後の行動や表現の源となる。十分な時間を待たず、子どもの世界をそっと探ることなしに保育者自身の感じ取りを伝えることにより、子どもは真に感じていることに意識を向けることが難しくなる場合もある。不思議に思うことや美しいものを自ら発見する体験、心を動かされて思考する時間が欠かせない。その子のなかで広がる豊かな世界に保育者が思いを寄せ、子どもの経験をより広げるような関わりが大切である。この点において、授業課題であった、自身の心動かされたことへの保育者の関わりについての記述では、学生の実感を伴う学びの姿が散見された（表6、表8、表10）。

4-3　表出と表現の接点

提出課題の写真の説明文章（A①質問項目2）では、例えば、心動かされた体験の際、後から振り返れば思わず小さく声をあげていたといった、自身の「表出」に関する記述がみられた。幼い子どもでは、まだ自分の思いが自分でもわからないことも多く、他者に伝えようと表現しているというよりは、その時の心の動きに呼応し、声や表情となって表れたものも少なくない。とりわけ、言葉で表現することがまだ難しい乳児においては、自身の生理的な状態や言葉に置きかえることの難しい混沌とした感覚が、声や目線、表情、手の動き、姿勢といった「表出」や機嫌となって表れることも多い。その子なりに外界を捉える過程で思わず声をあげる、そのような伝達意図をもつとは限らない「表出」に対しても保育者が受容し、「表現」として捉えようと応じること、その往還が重要である。仄かで、まだ拙く、素朴な表しであっても、その子の内面の表れ、その子の生きる姿として保育者があたたかく受け止めていくことにより、子どもは安心感を抱き、自分なりの表現の意欲を育んでいく。そうして、自分の身体や声色、手にとったものを介して様々に表現する楽しさや人に伝わることの喜びに気づいていく。その子なりの世界への関わり方に着目し、表現の芽、表現に至る過程（何を感じ、何に心を動かしているのか）を捉えようとする保育者の姿勢が重要である。「感じることの大切さ」「子どもの様々な表現に応じる保育者の関わり」については、学生の記述に散見されている（表6、表8、表10）。

4-4 「感性と表現」の多様性

結果3-3（表8）および結果3-5（表10）より、授業課題への取り組みにおいて自他の感性と表現の違いに気づき、子どもの感性と表現の学びにつなげていく記述がみられた。外界から何を選び、どう感じ、どう捉え、どう表現するか、その違いが個性である。表現の源となる「感動体験」は、子どもの日常のなかに溢れている。そして、心を動かされ、感じたことをその子なりの形で表す。子どもの実態を捉えた保育者の援助は、子どもの感じる世界を受け止め、感じ取り、応じることにより成り立つ。また、結果3-3（表8）および結果3-5（表10）において、他者の感性や表現の違いを「良さ」として認める記述が多々みられた。自分の感じたことや表現、こだわりが他者から受け止められ、尊重される経験を重ねることで、子どもは自分とは異なる他者の存在を認め、良さを受け止める心を育む。保育者は、子どものありのままの感性と表現を受け止めること、表しに至らなくとも、そこに子どもの思いがあることに気づくこと、素朴な表現を見逃さないように心がけることが大切である。表しに至らない思いに気づくことを含め、子どもの表しに向き合う際には必然的に自身の感覚や感性を通すことになる。

A ②問 4 の結果を中心に、保育者に求められる姿勢や感性の豊かさの必要性について、学生の記述や数値に表れている。

5　まとめ・今後の課題

本稿では「子どもの理解と援助」に関する実践力を高めるための心理科目の教授内容として、「感性と表現」に焦点をあて、授業実践での学生の学びについて検討した。個々の学生なりに「子どもの感性と表現」、保育者としての関わりを考え、実習や将来の保育現場での実践を意識しており、「子どもの内面を捉えて援助する」という保育者養成課程の心理科目「子どもの理解と援助」の学びに通じたと思われる。子どもの「表し」の過程を考えること、子どもの存在そのものが「表現」であること、幼い子どもの表出は「表現」との接点があること、これらの学びの姿が学生の記述のなかに見られた。「感性」は「感覚」を起点とした一連のつながりであることについて「五感を通して豊かな体験となるように」などの記述があることから、山本（2019）の「感覚」への意識についての調査や、佐藤（2018）の「豊かな感性」の起点である「感覚体験」とつながる結果となった。

子どもの感性を学ぶつもりで、日常のなかから心動いたものを探し、子どもの視点で捉えることを課題としたが、公共の場で不特定多数の人物が写真に映り込むことを避けるため、対象から「ひと」を除外した。まずはじっくりと対象となる「もの」と関わる、子どもが対象に向かって静かに感じているときには受容的な保育者の関わりもあるという学生の気づきは、課題の設定条件の影響もあると推測する。環境は「もの・こと・ひと」の相互作用であるから、保育者の子どもへの関わりについての学生の捉えは、今後の保育現場での実践により変化していくと推測する。

実習経験の浅い時期は、自らの発信で子どもに声を掛けることの難しさを感じる学生も多い。子どもが「感じる」世界を保育者も「感じる」こと、子どもの素朴な表現や表現の芽を大切に、伝えたい思いを汲み取ることが大切であること、感性と表現が個々で多様であることなどを学生が実感を伴って理解することが保育実践に向けた学びとなると筆者は考える。当初の計画と異なり、コロナ禍によるオンラインでの授業展開となったが、限られた環境条件のなかで自らを表現することや意見を交わすことも学生の学びとなったと想像する。今後は、実習における子どもの感性と表現の具体的な捉えといった、実践と結びついた調査を行い、心理科目としての教授内容に活かしていく。

引用文献

佐藤寛子 2018「幼稚園教育要領における「豊かな感性」のみとりの観点－ 5 歳児の遊び場面の事例検証から－」『美術教育学研究』第 50 号 193-200

汐見稔幸、岡本拡子、花原幹夫 編著 2020「第 1 章 子どもの感性と表現」『アクティベート保育学 11　保育内容「表現」』ミネルヴァ書房 3-23

津守真 1979『子どもの世界をどうみるか　行為とその意味』日本放送出版協会　14

新村出 2018『広辞苑（第 7 版）』岩村書店

平田智久、小林紀子、砂上史子 編 2010『最新保育講座⑪ 保育内容「表現」』ミネルヴァ書房 11

山田麻美子 2020「保育内容「表現Ⅰ」における学生の学びと今後の課題について」『有明教育芸術短期大学紀要』第 11 巻 49-58

山本有紀 2010「子ども理解と援助に関する心理科目からの検討（1）発達理解 －実習での戸惑いと対応に関する実態調査－」『洗足論叢』第 39 号 111-122

山本有紀 2011「子ども理解と援助に関する心理科目からの検討（2）心情把握 －実習における心情把握の方法および対応の実態－」『洗足論叢』第 40 号 177-186

山本有紀 2012「観察および記録に関する一試論 －心情把握の根拠－」『洗足論叢』第 41 号 91-104

山本有紀 2019「子ども理解と援助に関する心理科目の授業実践－“感覚”への意識による気づきと学び－」『洗足論叢』第 47 号 117-130

レイチェル・カーソン（上遠恵子 訳）1996『センス・オブ・ワンダー』新潮社 24